

JOMF 派遣医師便り (2016. 7)

◆シンガポール◆

結 核

シンガポール日本人会クリニック

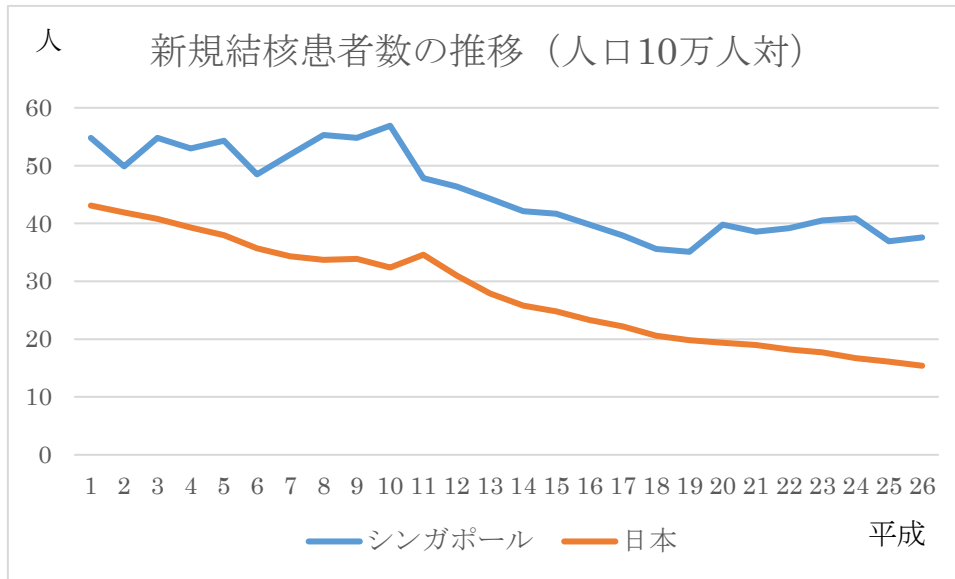
日暮 浩実

先日、シンガポールの AN MO K10 という地区の HDB¹（公団住宅）で多剤耐性結核の集団発生が報告されました。過去 4 年の間に同じ HDB で 6 人の多剤耐性結核が見つかっており、近頃その棟の居住者、および以前の居住者を調査したところ、活動性の結核患者がさらに 2 人見つかったとのことでした。HDB 居住者なのでいずれもシンガポール国民です。年齢層は 20 代から 70 代でした。

最初の 3 人の患者さんは家族内発症でした。2012 年 2 月、その家族で最初の患者さんが診断され、他の家族員のモニターが開始されました。そして、一人が同年 5 月に発症、さらに 10 月にもう一人が発症しました。その後、2014 年 4 月と 10 月、同じ建物内の別のユニットで多剤耐性結核の患者さんの報告があり、さらに本年 5 月、新たにもう一人の患者さんが同じ建物内のさらに別のユニットで見つかったことで、ここで始めて今までの患者との関連が強く疑われることになりました。これらの菌株は遺伝子的に同一であることが、既に示されています。そして、この 6 月に同じ建物内の居住者、及び前の居住者の検診が行われることになりました。そこで新たに 2 人の患者が見つかったというわけです。これらの患者は既に治療を終えているか、または治療中であり、既に他への感染性はないと考えられています。

さて、そもそもシンガポールの結核の状況はどのくらいか見てみますと、昨今の年次の新規結核患者数は日本の 2 倍程度（平成年代のはじめの日本ぐらい：図 1 参照）です。患者層としては、日本と同様、過去の結核の蔓延を反映して、年齢が高くなるほど割合が高くなっています。50 歳以上が新規発症の 2/3 を占めます。また、2014 年の新規結核患者のうち国民と永住権保持者からは 1591 人（54%）、それ以外の者からは 1329 人（46%）の患者発生でした²。多剤耐性結核に関しては、2011-14 年の統計では、国民、永住権保持者の結核患者では 0-2%でしたが、それ以外の者からは 2.5-4.8%と有意に多かったことも特徴的です。

年次推移では多剤耐性の結核患者が増えているということは観察されているわけではありませんが、急速に高齢化する人口と外国からの人口の流入³は続いており、結核においても高齢化対策、外国人患者への対策が課題となっています。



註1 HDB— Housing Development Boardの頭文字。住宅供給会社のようなものであるが、多くの場合、この公社が建造した建物、つまり公団住宅を指す。その中の各ユニット（1家族の居住空間）は床面積に応じて6種類のタイプがあり、その広さは36-110m²である。古いものは低層であったが、最近では20階建て以上の高層建築となっており、高層または平の十分なスペースの駐車場も併設され、数棟以上が集合して住宅地区を形成している。階下にはショッピングセンターやホーカーという小食堂の集合体、開業のクリニックや祭式のできる広間、公園なども併設されていて、基本的な衣食住はその集合住宅地区周辺でことが足りるようになっている。

註2 シンガポールの人口比率は日本とは大きく異なり、国民と永住権を含めた人口は全人口の70.5%しかなく、それ以外の人口（長期、短期の就労ビザ保持者など、全て外国籍）が人口の約30%を占めます。

註3 過去10年ほどで在住人口は約130万人増え（約30%）、553万人（2015年）となっています。